



こども食堂の現状 & 困りごとアンケート結果

vol.2

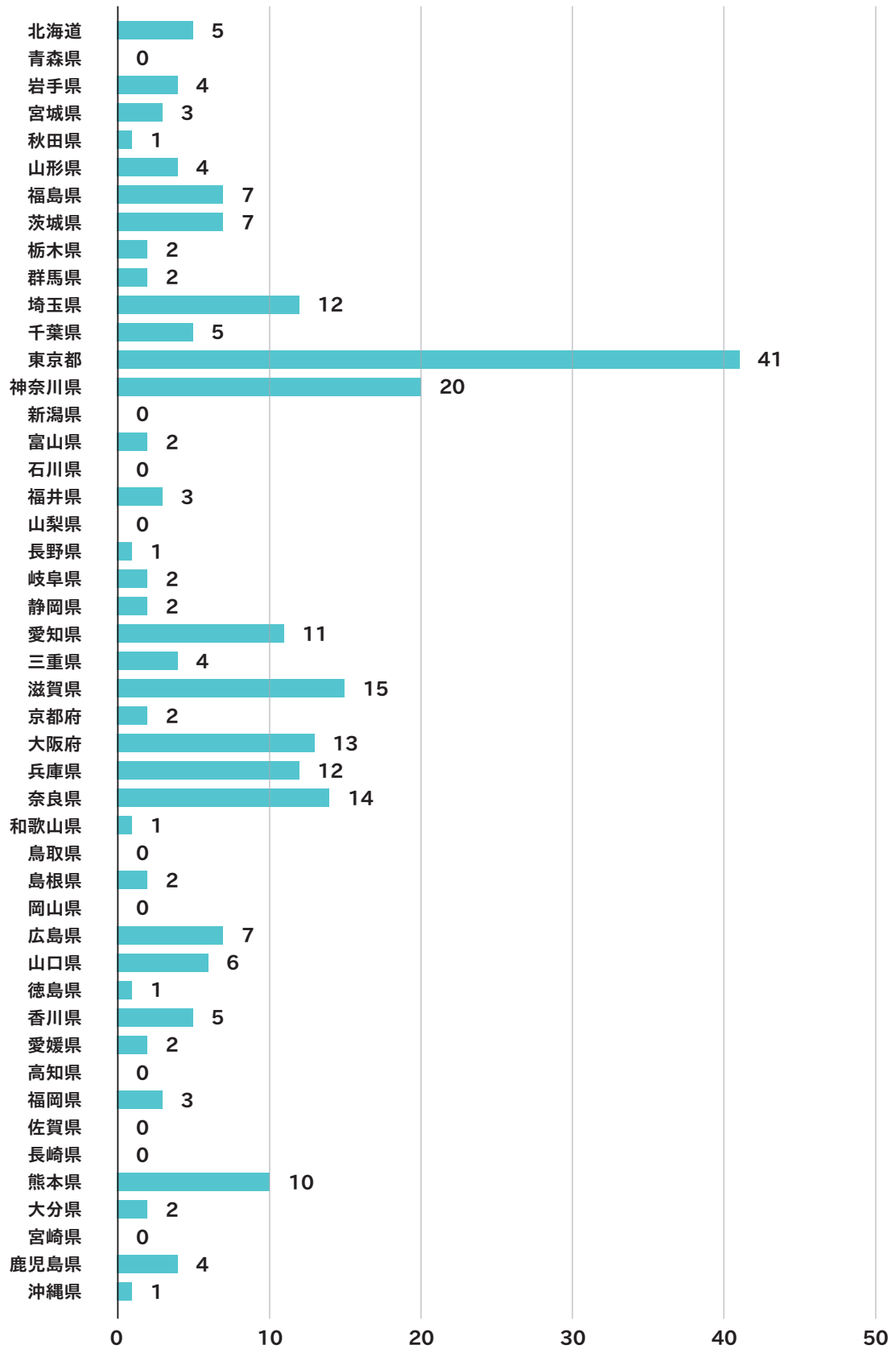
-
- 回答期限 : 6.19(金)～6.25(木)
- 回答者 : 各地の「こども食堂の地域ネットワーク」および「こども食堂ネットワーク」とつながるこども食堂(むすびえの「地域ネットワークメーリングリスト」と「こども食堂ネットワークのメーリングリスト」から回答を呼びかけ)
- 回答数 : 37都道府県238団体
- 実施 : NPO 法人全国こども食堂支援センター・むすびえ、こども食堂ネットワーク
-

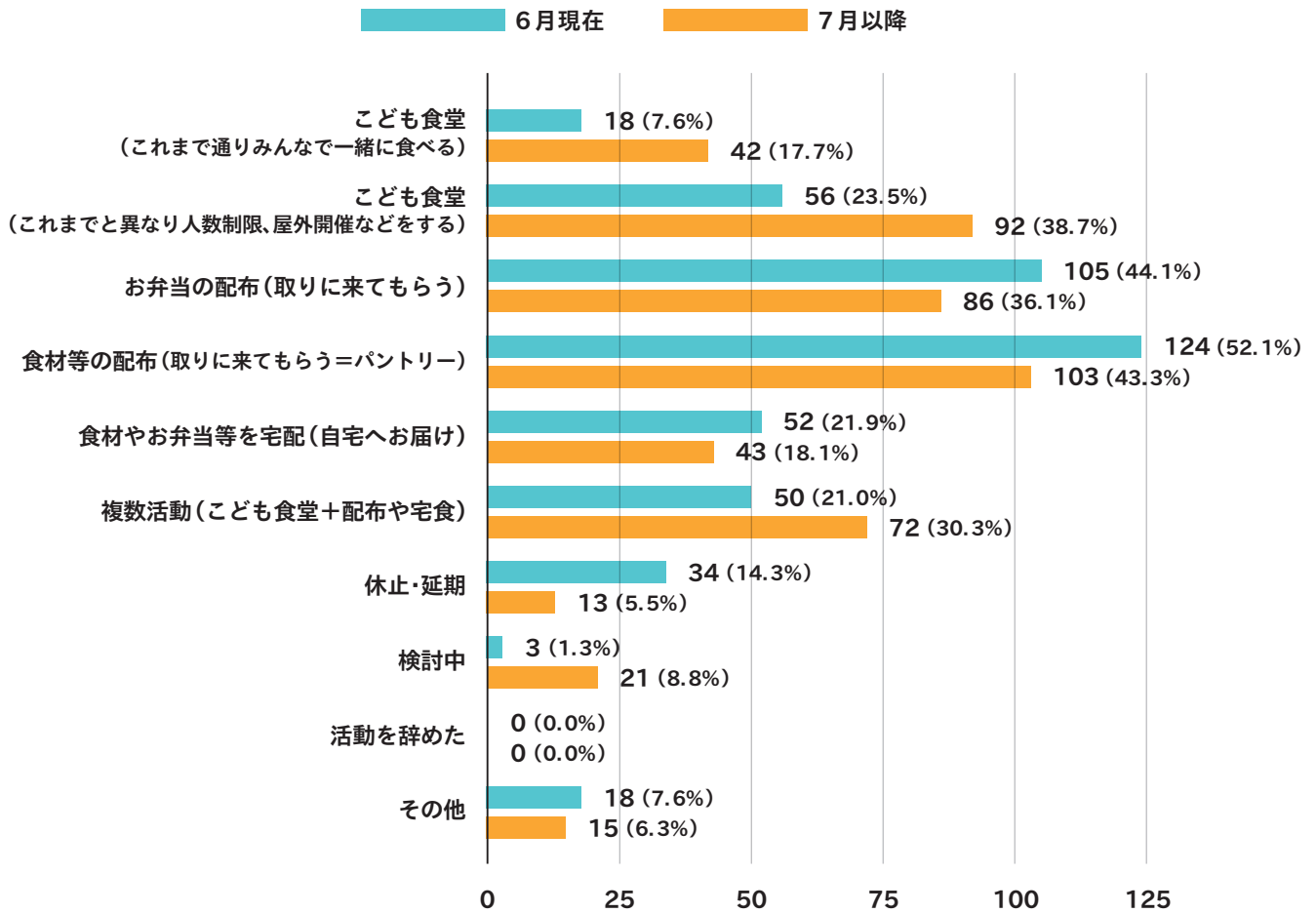
「こども食堂の現状&困りごとアンケート調査結果 vol.1」(2020/4/13～4/17実施)は、むすびえのウェブサイトで見ることができます。

<https://musubie.org/news/2126/>

都道府県別の回答したこども食堂の数

回答数 = 238



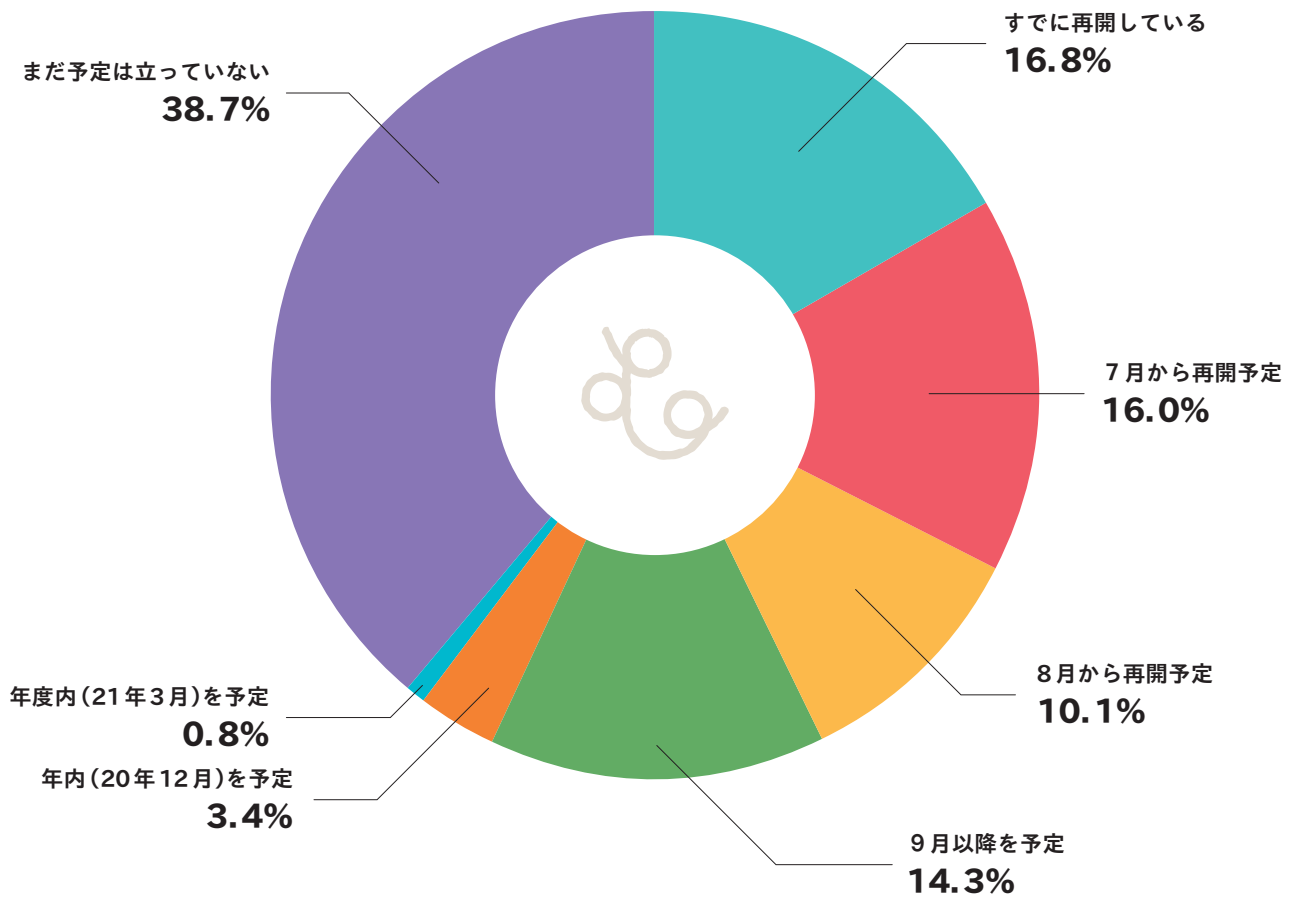


アンケートからわかること

6月までは、居場所としてのこども食堂の開催は約3割と難しかったが、7月以降、5割以上のこども食堂が、居場所としてのこども食堂の開催を予定している。

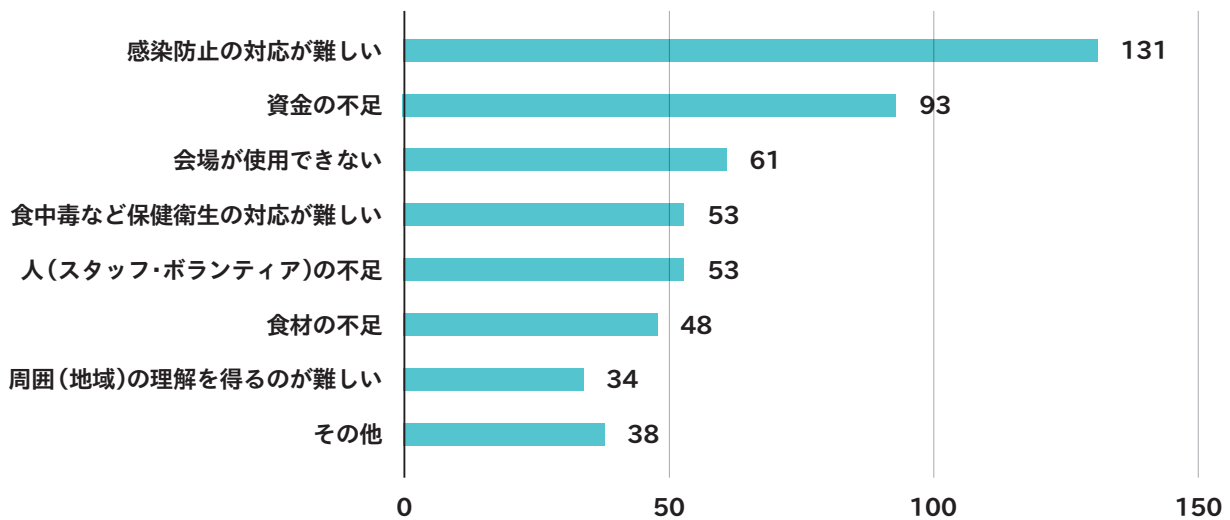
・居場所としてのこども食堂が開催できない際には、お弁当や食材等の配布、宅配をしていたところが多かった。若干の減少は見られるが、7月以降もこうした活動を継続するところが多い。

・7月以降、「こども食堂」+「お弁当や食材等の配布・宅配」の活動を両立して続ける団体が全体の3割(72団体)にのぼる。こども食堂+αの活動の内訳(複数回答可)を見ると、「お弁当の配付」が43団体(59.7%)、「食材等の配付(=フードパントリー)」が50団体(69.4%)、「食材やお弁当の宅配」が23軒(31.9%)となっている。



アンケートからわかること

- ・すでに再開しているこども食堂を含めて徐々に再開が予定され、約6割が今年中の再開を目指している。
- ・一方で、約4割はまだ予定が立てられずにいる。
- ・予定を立てられないいちばんの理由は「新型コロナウイルスの状況次第」であり、「治療薬やワクチンが開発されたら」といった声もあった。また、行政の判断や会場の都合で予定を立てられない例もあった。



[その他(一部抜粋)]

- ・今までの参加者さんもコロナ感染を恐れてか、なかなか来ていただけない。
- ・会場が狭く、密の状態を避けられない。始めるとしたら、これまでの形態から新しい食堂を考える必要がある。
- ・お弁当を作って配布したいが、保健所から持ち帰りの許可がおりない。
- ・今後、いつからコロナ前の開催方法で出来るのか、その区切りはどこでつけるのか、悩んでおります。
- ・1年かけて子どもが来るようになったがコロナで振り出しにもどった。
- ・おしゃべりしながら、楽しく食事ができない。
- ・万が一、コロナに罹ってしまった参加者に対応する保険がない。
- ・お弁当に慣れてしまい、居場所として元通り復活できるか、不安。
- ・タブレットを貸してくださる企業・団体様の開拓。
- ・ペーパータオルやビニール手袋などの衛生用品が手に入らない。
- ・切羽詰まったご家庭へのアプローチ。個人情報保護のため行政の壁の高さを実感。
- ・行政や学校との連携が難しい。
- ・社協の行事保険に入っていたが、お弁当の配布は対象外といわれ保険に入っていない。
- ・調理用品の不足。

アンケートからわかること

- ・その他の記述も含めて、新型コロナウイルスへの対策が、現在のいちばんの困りごととなっている。
- ・コロナ禍で困難を抱える家庭(子ども)との関係性が増えたからこそ、支援をするうえでの資金面の不足が浮き彫りになってきたことが推測される。

4 こども食堂の再開へ向けた課題や考え (自由筆記)

アンケートからわかること

・もっとも印象的だったのは、居場所としてのこども食堂の本旨・本質・原義に立ち返る記述が多かったこと。居場所とは3密(「こども食堂=超密」)であり、3密の回避は居場所の居場所性を失わせてしまう。コロナ禍がこども食堂の本質に打撃を与えている実態が赤裸々に示されている一方で、食事提供だけではないこども食堂の本旨・本質がより明瞭に意識されるに至っているとも言える。

・目立ったのは感染症対策に関する記述。人数制限、時間制限など。しかし、どれだけやっても完全ではないだけに、不安の声も多い。同時に、団体内(スタッフ・ボランティア間)や団体外(利用者や地域住民や行政)に開催をめぐって賛成・反対双方の意見があり、運営者は苦しい調整と選択を迫られている。

・こども食堂は、多世代交流拠点として高齢者も参加する場だただけに、高齢者を気遣う声も散見された。

・衛生対策や、人数制限の代わりに回数を増やすことによる資金面の課題、公民館が使用できない(まだ用途制限がある等)、フィジカル・ディスタンスをとるためにより広い場所が必要といった理由から、場所の課題も挙げられている。

・一堂に会する形でのこども食堂の開催には不安が残ることから、引き続き多くの団体がフードパントリーの活動を行う予定。ただ、そこに居場所とは異なる個別支援の価値を見出している団体も少なくない。

居場所としてのこども食堂

・コロナ対策で少人数の参加受付になるが先着順? 抽選? どうしたら参加者のがっかり感をうめられるかと考えてます(岩手県)。

・このコロナで規模を小さくしなければなく心が痛いです(岩手県)。

・衛生、密度、参加者の意識度とスタッフ側各々の意識度の違いもあり、笑顔で共有出来る時間を提供することの難しさを感じながらの再開でした。こちらが思ってた以上に参加者の方々が喜んで下さり開催してよかった! と安堵してます。食材提供が有り難いとの声、食事して楽しめる時間、場所、全てにおいて子育て支援の大切さを改めて運営する私達は実感してます(秋田県)。

- ・こども食堂の本意を考えますと、コロナウイルスなんかには負けてられない！ どんどん食べて大きくなみなさい！ と、言いたいところですが、実際にことの重大さを感じてくると、慎重を期さないわけにはいきません。そんななかの、お弁当は良い考えだなあと思いました(茨城県)。
- ・実際に始まってしまえば、子どもたちが自由に過ごす中で飛沫・接触等を厳しく見ていくことは非常に難しいことです。空間的距離を意識しつつも、心の距離を離さないよう、地域で子どもたちを見守っていくことが必要だと感じています(栃木県)。
- ・こども食堂の開催趣旨との背反が多い(埼玉県)。
- ・分散開催だと食べた後ゆっくり寛いで貰えない(埼玉県)。
- ・こども食堂=超密、と当こども食堂は考えます。分散化での開催も考えましたが、ご飯食べてご馳走様でさようなら、という食べるだけでは、今までのこども食堂とはだいぶ変わるなど。美味しく食べて、楽しく遊んで、親御さんはゆっくりして、というのが当こども食堂であった気がします。食べるだけのこども食堂開催希望があれば考えたいとも思います(東京都)。
- ・人数制限や時間制限なども考えましたが、そうすると、食べるだけの場所になってしまうのではないかと、躊躇してしまいます(東京都)。
- ・また当面、同世代、多世代の交流が図れず本来の目的からは程遠い「食事だけ」の場所になってしまう事への疑問(本当にそれでいいのか?)が常にある。さらに、会場が手狭なため「密」を避けるためには人数制限せざるを得ず、心苦しい限り(東京都)。
- ・遊びや多年代の交流が全く出来ないのがとても残念です(東京都)。
- ・密になるのが楽しかった以前のこども食堂を同じように開催するのは大変厳しい(東京都)。
- ・ソーシャルディスタンスの考え方は、こども食堂の目指すところとは「真逆だ」と思っているので、あえて取らない方向で行く。どのみち食堂を開催することは「感染リスクを取る」という選択であり、物品販売や飲食業で取っている間隔空けや飛沫防止ビニールシートなどはみな「感染対策やってますよ」という、実効性よりも「アライヴづくり」のためのアピールに過ぎないと思っている(京都府)。
- ・食事は黙ってさっさと済ませろ、向かい合わせではなく横並び、大皿で取り分けるのはNG・・・感染防止を全面に出すとこのような提言になるのかもしれませんがため息が出ます。この状態でどのように”食育”を推し進めるとおっしゃるのでしょうか。私達の食堂のキャッチフレーズは「みんなで食べたらいいね！」です。食事は単に空腹を満たすだけではなく、その場に集まった人達で話したり、笑ったりしながら心も満たす時間だと思っています。どのような形で再開できるのか、悩ましいところです(兵庫県)。
- ・元々子どもたちが集って一緒にご飯を食べることが目的の食堂であるが、コロナ後はそうはいかなくなったので、もう一度食堂のあり方を考えるべきかと思っている(兵庫県)。

- ・うちのこども食堂の良さや存在意義は、三密からくるところが大きかったと思うので、それを避けて営業を再開することの意味を考えると、よく分からなくなってくる(兵庫県)。
- ・子どもは集まったらうれしくてマスクもしなくなるし密になるに決まっている。そこを子どもたちに理解してもらい、マスク着用、近づかない、大きな声でしゃべらない、などの約束事を守ることができるのか(奈良県)。
- ・小さい子(小学生以下)の参加が多いので、三密を守らせようとする、親もこどもも楽しめそうにない(奈良県)。
- ・触れ合うことが本旨なのに、触れ合えない、遊べない(島根県)。
- ・現在推奨されている感染症拡大防止対策(制限の中で)をとった上での開催となると、安心して集い賑やか且つ家庭的な食事の場を提供する事が出来ない。再開するのであれば、インフルエンザ対応と同様のレベルまで制限のレベルを下げなければ、これまで当事業として行ってきた"こども食堂の理想的なカタチ"とはならない(広島県)。
- ・私たちのこども食堂は狭いマンションの一室に15家族ほどの親子が集まり、食事作りやおはなし会を楽しんだ後ワイワイガヤガヤと交流する食堂でした。いわゆる「3密」が揃った環境です。普段は未就園児が集まる地域子育て支援拠点なので子どもの月齢も低く、大人の決めた約束ごとを守るはずもありません(香川県)。
- ・ソーシャルディスタンスや、除菌などさえきちんとしておけば開催できるので開催しておりますが、本来の目的で有るみんなで食べるは、なかなか、クリアになりませんが。取りに来てもらうだけでも、作り手と、食べる家族が笑顔で受け渡しはできているので、様子を見ながら。食べるか、持って帰るかを選んでもらう形で、やっていって。ほんとにもういいよー、となったらみんなで食べるという、大目標をクリアさせたいなーと思っています(愛媛県)。
- ・子供の居場所は、ますます重要になっている。公的な施設や、学校にも限界があり、家庭自体が不安定で安全な場所でなくなっているし、親が仕事に戻れば子供はうちの中に放置されてしまう。いないだけなら、いて有害よりはマシ、とも思えるが、子供にとっての仲間や安全な大人のいる居場所、が、とても重要である。学校での学習も、登校が途切れ途切れになったり、地域や家庭の環境に格差があるため、すべての子どもにとって危険な状態である。その軋轢を、穏やかに緩め、それぞれの子どもたちが自然体で過ごせる遊び場や、居場所、毎日贅沢でなくても、あるものを分け合って、ホッとできるみんなで食べるご飯、それがあつ場所が、こども食堂。いろんな、こども食堂が、それぞれ、できる形で、地域の子供達の居場所として、再開してほしい。私たちの活動は、小規模で、できることしかしないけれど、いろいろな出会いがあつて、いろんな人のよりどころになっているのが、とても嬉しい。まずは、こそつと、ちょっぴり、再開して、みんなでご飯を食べたり、ちょっと勉強したり、あそんだり、そんなふうに活動が再開できるといいと思う(福岡県)。
- ・3年近く続けている従来のこども食堂は高齢者が多いのだが、すっかり外出する気力が無いのか出足は少なく、孫連れの高齢者の姿も無く「弁当が欲しい」の声が聞かれた。弁当配布では宅配業者のサービスと変わらず、やはりみんなでテーブルを囲んでの食事がこども食堂としての意義が有るように思う(鹿児島県)。

こども食堂での感染症対策

- ・使用可能の場合、3密を回避するため事前申込制にして、一度に入場する来場者数をこれまでの3分の1に制限し座席の間隔を確保し、30分ごとに来場者を全員入れ替え窓を開放するなどの対応を検討しています(北海道)。
- ・私達の食堂では栄養士も調理師もいますが、配布後の衛生管理が不安なので開催を踏み切れずにいます。そんな訳で、少人数(12人)開催+消毒を挟み、3回転する開催にしました(埼玉県)。
- ・外部から見ても3密対策がきちんとできていると評価されるレベルの対策を作ること(埼玉県)。
- ・人が集まる事が親の理解を得られるか?(埼玉県)
- ・今は新しい生活様式に即した配慮や衛生管理をどうしていくか? がいちばんの課題です(埼玉県)。
- ・新型コロナのリスクを考えて、最小人数のスタッフで運営している。三密にならないように会場に入る人数を制限している。マスク、手洗い、消毒、換気に気をくばる(千葉県)。
- ・ある程度の少人数で実施しなくてはならないための負荷、しかも頻度を増やしているのも、それによる負荷がさらにかかって、参加スタッフに申し訳ない思いが続いている(千葉県)。
- ・学校給食が前を向いて喋らず食べる。で運営されているため、食堂ではシールドなど工夫して設備投資をしても少しくらい向き合ってお喋りが出来ないか計画しています(東京都)。
- ・感染症対策は、いくらしても追いつかない。こどもは三密が大好き。こどもは仕方がないところがありますが、そのような状態の場所に、ボランティアさんを呼ぶことに躊躇があります(神奈川県)。
- ・蜜にならない工夫をするには人数を大幅に減らさなければならない。が、楽しみにしてくれていた子たちを断るのも忍びないので時差開催をしたいけれど、そうするとスタッフの数が足りない(大阪府)。
- ・普段は匿名でもOKなのですがクラスター発生、感染者が出た時のため名前と連絡先を記入してもらいました(兵庫県)。
- ・人数を思い切った制限。これまでは150人ほどでしたが、これからは80人ほどになりそうです(熊本県)。

新型コロナ感染の不安

- ・クラスター感染源にならなければ良いが、そうなってしまった場合の不安はある(北海道)。
- ・当食堂から感染者が出た時の対応が課題だと感じております(岩手県)。

- ・万が一、コロナの感染者が出た場合に責任を取ることが出来ない(山形県)。
- ・もし今再開して、クラスターが発生した場合、コロナ云々よりも、地域の子供達が参加している関係上、「うつした」「うつされた」などの憶測や中傷が広まり、今後の人間関係に支障をきたす事が1番怖いです。なので、うちではワクチンが開発されるなどで世間が今まで通りの生活に戻った時点で、室内での再開にしようと考えています(和歌山県)。

意識のズレ・周囲の理解

- ・スタッフ間の意識のずれを感じる。開催にあたりどこまでの子に声をかけるか、一緒に作るという事で許可を得ている中で作って提供することはできないため屋外炊飯を考えている(福島県)。
- ・私が医療関係の仕事をしているので職場の理解も含めて、周囲の理解を頂くのが難しく感じています(福島県)。
- ・コロナ禍に対する皆さんの温度差が大きく、意見をまとめる事が難しい(埼玉県)。
- ・コロナの対策は正解がなく、人によっても考え方が違うので、決定が難しいです(東京都)。
- ・代表者である私は、屋外での開催などに変えて、今月から試験的にやってみることを提案したが、これまでのスタッフには賛同を得られず(感染拡大予防で皆んな我慢しているのだから、まだ再開は早い、などという意見)、同じスタッフでの開催を断念した(広島県)。
- ・参加する家族が疑心暗鬼(山口県)。
- ・施設使用にあたっての感染防止への対応が行政によって異なり、スタッフ間の認識を統一するのが難しい(山口県)。
- ・6月はパントリーを開催出来る事になったんですが、どこまで子ども達に渡すのか？ まず集まること事態、密ではないか？ と色々な意見がありました(熊本県)。

参加者の抵抗感

- ・参加者さんからお話を伺っていると、仲良し同士ならグループで参加したいという方が多いなか、仲良しだとしても、感染のリスクを考えると、他の親子と一緒に遊ぶことに抵抗がある方もまだいらっしゃいます(宮城県)。
- ・利用者(保護者)アンケートでは、再開希望と、まだ不安という声が半々です(東京都)。
- ・何人かの利用者に意見を聞いたところ「お弁当なら利用するが、通常のこども食堂だとちょっと…」って方がほとんどだった(東京都)。

- ・6月から再開したが集団で食事をすることに抵抗があるのか、通常の1/3しか集まらなかった。7月以降利用者さんが戻ってくるか心配(東京都)。
- ・現在開催しているが、子供の参加者が少ないので、大人保護者から参加していただき、徐々に子供が来れるようにと考えています(奈良県)。
- ・まだまだ親御さんのコロナ感染に対する不安感が強く子どもだけの参加が厳しいように思う。高齢者も参加するため、特に意識されている保護者がまだ多いのでは(熊本県)。

高齢者への配慮

- ・調理ボランティアが高齢のため、マスクをして調理に不安がある(茨城県)。
- ・新型コロナが「感染しても無症状のこども」からシニアに感染させることがある、という不安が消えない限り、以前の形に戻すことは難しい(埼玉県)。
- ・ご年配のスタッフ自身も参加を見合わせており、一人でも欠けると開催が難しくなるほどの最少人数で回している(神奈川県)。

資金の不足

- ・衛生管理は整えたが、これ以上の対策には資金がかかりすぎる(山形県)。
- ・もっと活動を広くしたり、いろいろなことをやりたいが、そこまでの資金がない(福島県)。
- ・こども食堂・お弁当・パントリーと支援の多様化が見えてきたので、その分の人材や資金、時間の確保が増える(群馬県)。
- ・うちは全員に障害があったり、不登校だったり、山奥で一人暮らししているお年寄りだったりするので出向く事が困難です。できるだけお届けしたいと思いますが食材やなんといっても資金が全然足りず、動けば動くほどうちもうちも！こっちも！と連絡がありその方全員に何か手を差し伸べたいと思っていますが私自身が母子家庭でその日その日を必死に生きている状態なのでなかなか手が届かず申し訳ない気持ちでいっぱいです。どう資金を作るかが1番の課題です(福井県)。
- ・以前は40人ほどの子どもたちが来てくれました。再開するには、半分くらいの人数で、回数を増やし実施予定です。部屋代などの経費がかかるのと、スタッフの確保が難しいです(兵庫県)。
- ・密を避けるために開催回数を増やして一回当たりの参加人数を絞ることを検討しているが、回数が増える分、費用や食材の確保をどうするか検討している状態です(熊本県)。

場所の確保

- ・町内会館の使用料を無料化して欲しい(北海道)。
- ・公共施設が調理室使用を禁止している(埼玉県)。
- ・空き家を借りて自由にできる拠点を作ることを検討中(東京都)。
- ・自分たちの場所を確保することが喫緊の課題です(東京都)。
- ・会場の都合に左右されることが厳しい(東京都)。
- ・社会福祉協議会の協力を得て、障害者施設の広い食堂での開催にこぎつける事ができ、社協の職員、施設の職員の方々や地域の方々の協力により7月から食堂という形での開催ができそうです(広島県)。

フードパントリーの活動

- ・コロナのせいで仕事の短縮、日数減、国からの10万円などは、休校中の電気、ガス、水道代が嵩み食費には回せない様になってる。フードパントリーは有り難い。ず〜っと続けてほしい。10人中10人が仰ってます(宮城県)。
- ・今後は会場に集まるのは中高生の少人数にして、しばらくは会場をお借りしてのドライブスルー方式で食材配布や情報提供などと並行して学童さんや母子家庭への食材配布を行う予定です(福島県)。
- ・集まることができないのは残念ですが、フードパントリー等の活動で少し踏み込んだ支援にもなったように思います(埼玉県)。
- ・また食堂を再開したとしてもパントリー開催中に繋がった方々への引き続きの支援も大切に継続したいので、以前より資金調達、食材確保に力を入れなくてはならないことが予想されます。そのためにはやはり資金と人材の不足が課題です(埼玉県)。
- ・まだ東京では感染が収まっておらず、こども食堂を開催することにより、クラスターを引き起こす可能性もあるため、再開については当面無理だと感じています。そのため、しっかり安全対策を行い、フードパントリーとお弁当で対応をしようと考えています(東京都)。

弁当配布の活動

- ・コロナ禍で打撃を受けた地元飲食店とのコラボ弁当を続けているおかげで、地域の横の繋がりが強くなりました(大阪府)。

・基本的にワクチンなどができて、予防ができるようにならないと、狭い場所で、『居場所と食事の提供』の活動はできないと思っている。と、同時にお弁当配布に切り替えているわけだが、食中毒が心配。特に「子どもに配り、すぐに食べずゲームに夢中になり、5時間くらいたってから、思い出して食する」ということが、ありえるようなので、悩ましい(大阪府)。

・これまでのような一堂が会する形に戻すには、まだまだ安心材料が足りないと感じている。逆に、お弁当の配布にする事により、家族全員の利用が増え、利用者数が大幅に増加した。共働き世帯、ひとり親世帯が多い為、「久々にゆっくりできた」「楽をさせてもらった」と親御さんたちの喜びの声の質が変わり、メリットを感じた。それを受けて、居場所作りとしての機能を継続しつつ、お弁当配布も継続し、ステイホーム応援からアットホーム応援に移行することも視野にいれている(兵庫県)。

・7月8月は弁当の提供および持ち帰りを予定しているが、持ち帰りだと食中毒への心配が出てします(山口県)。

新しい活動の模索

・まずは近くのキャンプ場が再開したらバーベキュー場での活動を考えています。子ども達は思いっきり遊べて、3密を回避しやすいと考えます(神奈川県)。

・こども食堂に固執するのではなく、今の現状にあった方法を考えながら取り組むことで、子どもたちとの関係を途切れないようにしたいと思っています(愛知県)。

・今のスタイルから、新しいスタイルへ。交流を主としたスタイルから、子どもや大人の困りごとに対応するスタイルに。どんなスタイルを模索していくのか考える必要がある(愛知県)。

・一堂に介してのこども食堂から少人数の『居場所』に形を変えて開いています。地域の生の実情が見えてきました。イベント的なこども食堂は、町づくりの他の人でもできるのでは? と思いました。支援を必要としている人に関われるこども食堂にしたい。地域から落ちこぼれる人のない町にしたい(愛知県)。

・4月より、ZOOMを使っての一緒にご飯を食べるということも行ってきましたが、限られた子どもたちになってしまうこと(親が側にいる子供は参加出来るが…)で、誰でもとはいかなかったこと(福岡県)。

その他

・助成金や、補助金を何とかしたら良いとは思いますが、事務処理のスタミナがと、マンパワーの不足も出て応募出来ずに居るのが現状です(宮城県)。

・子どもたちの体験の不足、夏休みの短縮、登校しぶり、逼迫した家計状況、困窮などなど。こういう時こそこども食堂が担ってきたプラットフォームの役割と繋がりが必要だと実感しています(福島県)。

- ・専門家を交えて、論議をするネットワークづくりが必要です(茨城県)。
- ・お弁当配布となると温度管理や並んでいる時の熱中症対策などしっかり考えなければならないと思います(千葉県)。
- ・スタッフの交通費。大学生のスタッフが多く、普段は通学定期券を持っているが、今は大学の授業もすべてオンラインなので、みな定期を持っていない、一番遠い子で往復1,000円以上かかる(東京都)。
- ・アフターコロナは、自分たちは道義的に困窮家庭支援に舵を切るべきだろうと考えていますがスタッフの中にも感染のリスクの高い人、職を失った、仕事が減ったというメンバーもいる中で、何をどこまですればいいのか思案しています(東京都)。
- ・年間計画の中で、保健センターや栄養士の方からのお話や、子ども家庭センターからの話、ネット環境の取り組みなどの勉強会を組み立て、共有できるようにしました(東京都)。
- ・こども食堂をやっている人たちと広くシェアできるものがあると、助かります(滋賀県)。
- ・去年は、大勢の大学生がボランティアで来てくれましたが、今年はコロナの影響で前期の本格的な授業が始まっておらず、ボランティア学の単位取得のための学生の参加がない。また、アルバイト先の仕事なくなり、学費は定額通り必要で、ボランティアをしている時間があれば、かけもちでアルバイトをして、シフトが入ったらいつでも行けるようにして生活費を稼がないといけないと聞きました(徳島県)。

協力


村上財団
The Murakami Family Foundation